

「動きのアーカイヴ」構築の試み  
— 舞踏映像資料の集積と土方巽「舞踏譜の舞踏」の解明  
Construction of “HIJIKATA Butoh body movements” :  
To Throw light upon “Notational Butoh”

本間 友\* , 森下 隆\*\*

Resume:

舞踏が創始されて10年余、1970年代に入って土方巽はその創造精神を發揮し、世界に類のないメソッドをもって、新しい舞踏の構築に向かった。「舞踏譜の舞踏」である。土方巽アーカイヴでは、その舞踏譜の舞踏によって生まれた膨大な「動き」の動画像のアーカイヴィングをすすめ、土方舞踏の構造とメソッドの解明をめざしている。

今年是最初の舞踏作品とされている「禁色」の発表から50年ということで、世界各地で50th anniversaryとして催しが開かれている。世界のダンサーや研究者がそれぞれ、土方へのオマージュとリスペクトを捧げている。

それにしても舞踏とは何か。定義することはむずかしい。

土方の30年足らずの舞踏活動にあっても、その舞踏は絶えざる変化を遂げている。さらに、土方死後の、発展とはあえて言わないとしても、舞踏の拡散も著しい。それだけに、海外でも原点となる土方の舞踏にあらためて注目する気運にある。

### 舞踏譜と「動き」

本稿で提示する舞踏譜の舞踏は、土方死後、ようやく研究が開始され理解が広まった。アスベスト館の所蔵していた資料(スクラップブック)や土方の弟子たちが保持していた資料(ノート)が次第に公開されてきたことが後押しした。

そもそも、土方が舞踏譜によって作品をつくり始め、その方法を確立した1970年代にあっては、舞踏譜の存在は知られず、土方の舞踏表現が方法論をもって語られることもなかった。

慶應義塾大学アート・センターの土方巽アーカイヴ、およびDMC(デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構)のプロジェクトチームであるポートフォリオButohでは、舞踏譜の舞踏を解明する方法として、新しい舞踏資料の創造に取り組んでいる。

映像による「動きのアーカイヴ」の構築である。

その現状を報告し、将来を展望してみたい。

土方の舞踏譜とは何か。われわれが現在、舞踏譜と措定しているスクラップブックやノートやシートを舞踏譜とよびうるのか。

それらは「舞踊譜 notation」とも「図譜 score」ともいいがたい。すなわち、身体の動きを示す「図」もなければ、時間的推移を表わす「譜」もないからである。

その多くはただの言葉の羅列である。無数の言葉が並べられているにすぎない。もっとも、言葉の一つひとつが「動き」を示していることは確かである。

ただし、それらは「動き」の名称であるにすぎない。土方が創造・開発した「動き」が名前を与えられて記号化されているにすぎない。膨大な数の「動き」が創造されたが、その名称=記号から動きを推測させるものは数少ない。

つまり、土方の舞踏譜からは、彼が創造した「動き」を可視化しえない。ただ、舞踏譜を前にして土方の弟子たちの体験を聞き取ることで、舞踏譜の舞踏の方法やそれに基づく技法を記述することはできよう。しかし、土方が創造した「動き」そのものを正しく認識することはできないのであろう。

土方が開発・創造した「動き」は、たしかに膨大な数で存在する。けれども、舞踏譜の提示や技法の解説だけでは、具体的な動きを知ることはできない。

極論すれば、土方が創造・開発した「動き」は、弟子たちの身体の中にだけ存在するといつてよい。それらの動きの外在化、つまり弟子の舞踏家

\*ほんま ゆう(慶應義塾大学 アート・センター)

\*\*もりした たかし(慶應義塾大学 アート・センター)

#### ④「動きのアーカイヴ」構築の試み - 舞踏映像資料の集積と土方巽「舞踏譜の舞踏」の解明

たちが、土方から与えられた動き＝振りを実演することによって初めて見るができるのである。

#### 映像と身体

土方巽アーカイヴ（およびポートフォリオ Butoh）が、「動きのアーカイヴ」をプランニングして、プロジェクトとして取り組んでいる理由は、一にここにある。

その特徴を挙げれば、まず映像のアーカイヴであること。動画像のコレクションであることである。

ついで、デジタル・アーカイヴであること。デジタル・アーカイヴィングによって初めて、土方が開発した「動き」の膨大な数に対応することが可能となる。

そして、「動き」のみならず土方の舞踏創造の「方法」も自ずと明らかになること。舞踏譜の舞踏に適う研究と表現の方法を構築できれば容易になろう。

いずれにしろ、舞踏譜の舞踏を解明するためには、テキストや記録映像といった既存の資料だけでは不十分と考えられる。そこで、新たな資料の創造をもって、舞踏譜の舞踏の解明を果たそうとしている。

慶應義塾大学アート・センターに設置されているアーカイヴの基本理念は、ジェネティック・アーカイヴということにある。完成されたアート作品だけを研究対象にするのではなく、アートの制作のプロセスを重視しようとしている。

同時に、アーカイヴとしても、すでに集積された資料コーパスだけを対象にするのではなく、さらにアーカイヴ自身が新たに資料を生成することで、アートの生成のダイナミズムを捉えることができると考えている。

研究の前提となる、土方巽の〈舞踏譜の舞踏〉による「動き」の創造から定着へのプロセスを整理してみよう。次のようである。

- ① 土方巽による動きの開発（レファレンス）
- ② 土方巽による動きを内包した言葉の発信（エンコーディング）
- ③ 弟子による土方巽の言葉の記録（コードブック）
- ④ 弟子による動きの発現（身体化）

⑤ 弟子による身体化された言葉の記述（テキスト）

上記①は、土方巽自身がインスパイヤーされたさまざまな絵画作品や詩的言語を、「動き」の開発・創造過程であるいはレファレンスし、あるいはパラフレーズして、具体的な身体の動きに転化し「動き」を構築する作業である。

②から④は、土方と弟子たちが向き合って稽古場で行われる作業である。土方が弟子たちに図版資料を提示したり、動きを促す言葉を投げかけたりする作業である。それに応じて、弟子たちは土方の言葉をノートに記録し動きを身体化する。

時に土方は、弟子たちのノートに目を通しチェックするとともに「動き」の修正を行う。弟子たちはその後、さらにノートを整理して残すことになる。こうして、土方が創造した「動き」が定着する。

私たちの土方舞踏を探る研究は、上のプロセスを逆にたどることである。

すでに述べたように、舞踏手たちの身体には動きがある。動きには時間も付随している。舞踏家たちのノートに記述された言葉（記号表現）はすでに身体化されている。つまり、テキストの記述者である舞踏家の身体に動き（記号内容）は収められているのである。

それならば、土方から舞踏譜を与えられた弟子たちに、舞踏譜の動きを実演してもらえばいいということになる。それは、記号化された言葉（記号表現）を舞踏家の身体によって動き（記号内容）に転換する作業である。

#### コレクションとデータベース

その実演を撮影し「動き」の動画映像をファイリングすることで、動画像のノーテーションを作成することができる。それによって、第三者であるわれわれにも、舞踏譜の動きを明確にイメージすることができよう。こうして〈動きのアーカイヴ〉としてプランニングされたのが、動きの映像化であり、その動画のコレクションである。

前記の創造のプロセスでいえば、⑤のテキストをもとにして、④の身体化を映像でアーカイヴィングする作業である。

すでにこれまで、土方の弟子であった和栗由紀夫が、土方が創造した「動き」（のマトリクスと

なる言葉)を再構成した私家版『舞踏譜』に基づいて演じられた「動き」を動画像に収めている。「動き」の数にして、およそ千数百に上る。

また、同じく土方の弟子であった山本萌は、土方より舞踏作品として〈正面の衣裳〉が与えられているが、この作品のために創られた山本のソロの「動き」も、すでに動画像として収めてある。その「動き」は延べ数にして356。そのうち、動きの名称の数はカウントすると337である。

いずれも、土方によって創造された身振りが、言葉にエンコードされた動きである。「動き」のその数の膨大なことに驚かされるが、それらの一つひとつに名前が付けられ記号化されているのである。そして、その記号化された「動き」すべてが、弟子の体を借りて身体化されているわけである。

これらは、〈動きのアーカイヴ〉の基礎となる動画像であり動画コレクションとなる。そして、この動画像のコレクションをデータベースとして構築することは、舞踏譜の舞踏の基礎資料の形成といえる。

また、撮影された動きを映像コレクションとして整備することは、舞踏譜の舞踏のメソッドの理解に役立てることにとどまらず、今後、土方舞踏を継承し、さらには発展させるために貴重な資料として生かすことができよう。

そのためにも、単なるコーパスとしての映像のコレクションではなく、マトリクスともいべき映像のレクシク(集成体)の構築をめざすべきであろう。これらの映像にメタデータを加えてデ

ータベースを構築することや検索システムを制作することが求められよう。

ただし、これまで試行錯誤しつつ作成し、あるいは改修して提案してきたにすぎず、いまだ完成されたデータベースや検索システムは用意されていない。

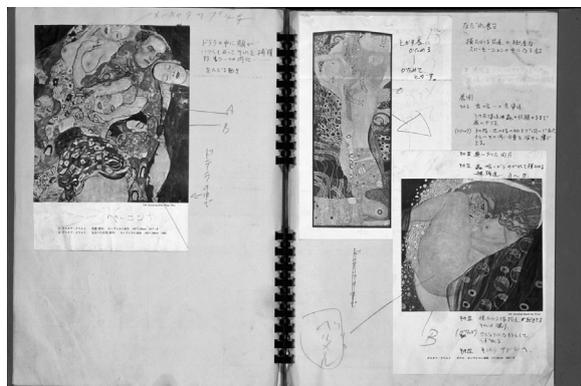
そのための基礎的作業としての、膨大な数の「動き」の映像化をひとまず終えている。また、同時に「舞踏譜の舞踏」の理論的解明はすすめることができたといえよう。

今後さらに、土方巽が開発・創造した「動き」とメソッドをさらに徹底して解析することで、「動きのアーカイヴ」として構築し、動きの映像をメタデータや研究成果とともに、広く公開し、世界の舞踏研究者や舞踏を学ぶダンサーに土方巽の舞踏を理解し、発展的に活用する展開をめざしたいと考えている。

そのためにも、さらに継続的、発展的に、舞踏家、映像技術者、ソフトウェアの開発者たちとの協働作業が必要である。

土方巽の舞踏が、世界のダンスに大きな影響を与えていることはますます明らかになりつつある。舞踏研究はすでに、外国人研究者によって担われているとあってよい。

しかし、土方の舞踏の解明と原理の提示が、広く世界から求められていることも確かである。舞踏思想と舞踏作品の解析、土方の舞踏世界を明らかにする作業はやはり、世界に先駆けて日本でこそ行すべき、というのがわれわれの希望であり使命である。



土方巽 舞踏譜 「なだれ飴」



「動きのアーカイヴ」撮影風景